

## 黄金郷梅ヶ島 : 中部支部巡検報告

著者	青木 克顕
雑誌名	静岡地学
巻	53
ページ	35-37
発行年	1986-06-22
出版者	静岡県地学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00025491">http://doi.org/10.14945/00025491</a>

# 黄金郷梅ヶ島

## —中部支部巡検報告—

青木克顕\*

### 1 はじめに

「砂金掘りをしてみませんか!」というキャッチフレーズに誘われ、今回の梅ヶ島巡検会には、小学生から、白髪実年の方まで総勢 25 名が参加した。当日の 10 月 26 日は、雲ひとつない好天で、美しい紅葉を眺めたり、砂金掘りに興じたりして、楽しい秋の一日を過ごした。案内役は、著者ら中部運営委員が勤めた。

見学コース案内図を図 1 に示す。図 1 中の丸囲み数字は、以下の表題や文中の丸囲み数字に対応する。

朝 9 時に梅ヶ島小学校前に集合。数台の車に分乗して、大谷崩へ向かった。大谷崩は、日本三大崩の一つに数えられる大崩壊地で、最上端の大谷嶺 (標高 1997.7 m) から、最下端までの標高差約 800 m あり、崩壊土量は 1 億 2000 万 m<sup>3</sup>といわれている。新田で県道を左折し、大谷川沿いに山道を進む。車窓から川原をのぞくと、工事中のものも含め、いたる所に砂防ダムがあり、崩壊が現在も進行中であることがわかる。

### 2 大谷崩 ①

20 分ほどで、<sup>おおぎ</sup>扇の要<sup>かなめ</sup>に到着。まっ青な空と紅葉が大変美しい。まさに別天地だ。目の前には、切り立った崖が、西・南・東方向にせまり、「扇の要」という地名がぴったりである。足元には、瀬戸川層群に属する暗灰白色の砂岩の礫が見られ、時折、石が音を立ててころがり落ちて来る。一行はここで、記念撮影などを楽しんだ。(写真 1)

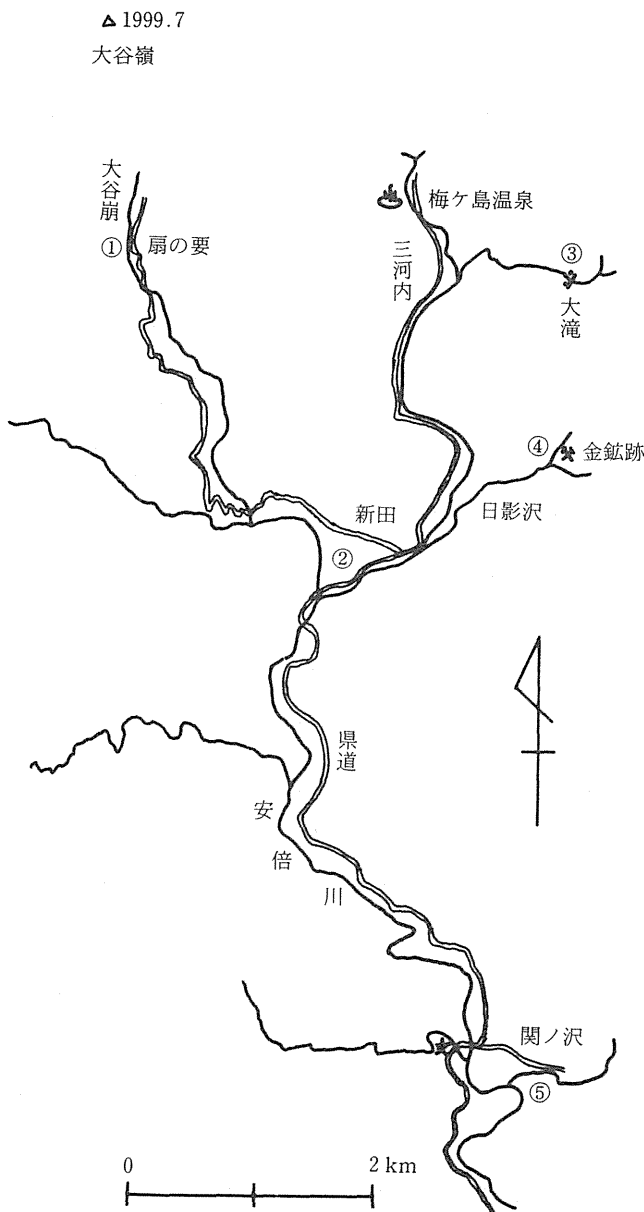


図 1 梅ヶ島案内図

\*静岡市立梅ヶ島小学校

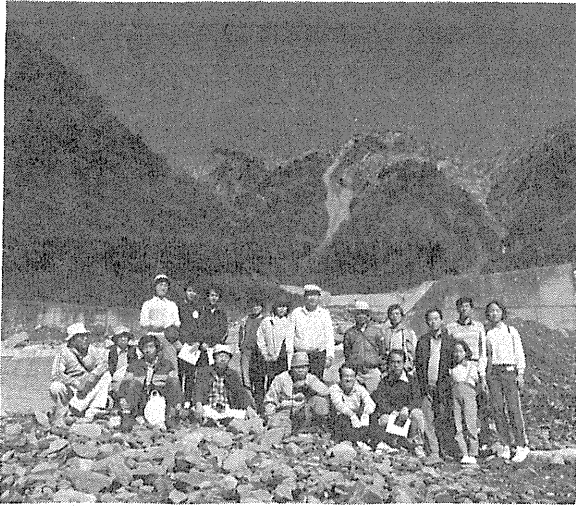


写真1 大谷崩れ



写真2 河岸段丘(新田)

大谷崩から押し出された崩壊物は、所々に河岸段丘を形成している。その一つが、「新田」である。私たちは、大谷崩から県道へ引き返す途中で、それを観察できた。

②(写真2)

### 3 安倍の大滝 ③

県道を再び北へ走り、三河内で下車、大滝へ向かう。二本のつり橋を渡り、リンドウの花咲く山道を20分ほど歩くと、東海路随一といわれる大滝が現われた。この滝は高さが約120mあり、水量も豊富で、滝に近づくには、かなりの水しぶきをあびることを覚悟しなければならない。この辺では、紅葉にはまだ少し早かったが、もう10日すれば、見事な錦絵が見られることだろう。冬、凍結した滝も見ごたえがあるそうだ。

### 4 日影沢金山

日影沢金山に行くためには、安倍川を徒歩で渡らなければならない。当日は、幸運にも水量が少なく、足をぬらさずに渡ることができた。さらに、日影沢に沿って20分ほど歩く。川原には、フジアザミの花が美しく咲き、心をなごませてくれた。この花は、キク科の多年草で、ノアザミ属の中では最も大きく、葉は50~70cm、花は子どものにぎりこぶしほどの大きさがある。根も太くて、

ゴボウの代用として食用となるため、フジゴボウの代名もある。砂防ダムをのり越え、ようやくたどり着いた金鉱は、川原から少し登った所にあり、木々に隠れて、案内者なしで見つけることは難しい。残念ながら、現在は入口から3mほど入った所で土砂に埋っており、中に入ることはできない。

梅ヶ島では、奈良時代(推定)から第二次世界大戦後まで、金の採掘がおこなわれており、特に慶長年間(1596~1615)には、駿河大判や慶長小判にこの金が使われた。その当時は、300人以上の金掘りが集まり、女郎小屋なども立ってにぎわったらしい。

金鉱入口を見た後、女郎の墓を回り、午前の予定を終了した。

### 4 砂金掘り ⑤

昼食後、いよいよ今日のお目当て、砂金掘りをおこなうことになった。手に手に、スコップやふるい、洗面器などを持ち、皆やる気満々である。新田に住む新井正氏の助言を得て、関ノ沢の旧変電所跡付近で作業にとりかかった(図2と写真3)。

「あったー。」「あ、流れちゃった。」「だめだねえ。」などと、様々な声のとび交う中、気の長い人は

3時間余りがんばった。思ったほどは採れなくて、がっかりされた方が多かったようだが、一粒でも見つけれられた人は、笑いが止まらぬようであった。

### 5 おわりに

今回の巡検会では、砂金掘りに挑戦したが、そのために、長島昭、八木祥文、松本仁美会員らは、前日から当地に泊り込んで準備をされ、櫻井美津夫会員は、奥様の御出産のため当日は参加できなかったものの、前日の準備に加わり、資料を作成して下さった。さらに、地元の新井正氏には、砂



写真3 砂金掘り(関ノ沢)

金掘りの技術指導をしていただき、道具もお貸しいただいた。同じく地元の小泉計作氏には、金鉢の坑道図をお借りし、金塊を拾った経験談などをお聴かせいただいた。ここに深く感謝いたします。

中部支部では、今後も楽しい巡検会を行って参りたいと考えております。多くの会員の参加をお待ちしています。

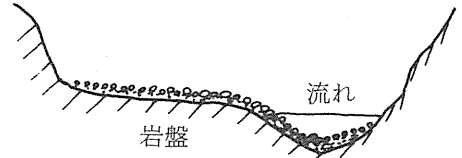


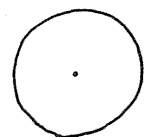
<p>① 上の石を除き、川床の上の砂と小石をスコップですくう。</p> <p>○水の中でなくてよい 大きな岩のうしろなど、金がたまりそうな所をねらう。 ○礫が、あまり厚く積っている所は、労力があるのでさける。</p> 	<p>② 洗面器(ボール)の中に砂と小石を入れ、水を入れて、ゆすりながら、小石や砂を徐々に流していく。</p> <p>○砂金は小さいので水面に浮き上がってくることがある。その時は、上から水をかけ沈ませる。</p> 
<p>③ 底にたまった砂(砂金を含む)を、おわんのフタに移し、水を入れて、慎重にゆすりながら、砂を除いていく。</p> <p>○ここが一番むずかしい。</p> 	<p>④ そして、いよいよ感激の一瞬! 最後にキラリと砂金が輝くこともある。</p> <p>○砂金を完全に砂と分けることはできないので、小ビンと一緒に移す。 ○雲母や、砂鉄とまちがえないように。</p> 

図2 今回行った砂金掘りの方法